

「不朽の我ら」

昔、父から譲ってもらったマウンテンバイクに乗っていました。昔というのは、本当に昔で小学生の頃の話です。小学生が父譲りのマウンテンバイクに乗るのだから、それは文字通り背伸びをしていたという思い出です。でも、小学生って、そういう背伸び大好きですよ。体格に合わない自転車を乗り回す、私の姿は、非常に危なっかしく見えたと思います。しかし、そもそも父親が乗っていた自転車という時点で、それは、もう型落ちも甚だしい中古品なわけです。周りの友人達は、モダンな新しく格好いい自転車を買ってもらいます。なまじ大人用の頑丈だった私の中古自転車は、その大きさ以外に特に魅力はなく、背伸びをして乗るのが、実は本人的にもしんどかった私としては、だんだんと父譲りの自転車への愛着を失っていきました。さあ、そんな私は、どうしたでしょうか。日に日に新しい自転車への願望が募る私は、今思い出すとホント馬鹿だなあと思える行動に出ます。私は、急勾配の坂道を自転車で全速力で駆け降りて、トップスピードのところで後ろブレーキを掛けて、後輪をロックさせて、こうブレーキ痕が残るように、タイヤを酷使したんですね。タイヤを摩耗させて使えなくさせるために。しかも、ちゃんと、坂道の上で摩耗させたいタイヤの位置を確認して、坂道を下る途中の決めた箇所でブレーキをかけて、常にタイヤの同じ位置が地面に削られるように調整してたわけですから、まあ、なんというか、その創意工夫を他に使いよって話ですよ。結局、小学生の私に変な情熱を持って取り組んだ、タイヤ摩耗作戦は成功せず、私が小学校を卒業する頃に、タイヤとは全く関係ない、ハンドルの付け根の部分が壊れて、父の中古マウンテンバイクとは、さよならを致しました。

当時は、非常に真剣に取り組んだ思い出がありますが、まあ、今思えば実に小学生らしい浅はか

な行動と言いますか、お馬鹿な取り組みだったかと思います。ただ、この思い出が単なる昔話として簡単に片付けられないなあ、と思うのは、基本的に我々の消費社会って、そういうものだということ。今、手元にある商品や製品が、必要十分に使えるか、どうかというのは、私たちの購買活動において、基本的な判断水準である一方で、私たちは、もっと、その手前のところで新しいものを欲することがあります。まだ十分に使えるけれど、デザインが廃れた、新作が出た、流行が変わった、新機能が付いた、処理速度が数秒改善された、操作性が若干良くなった。日常生活において、決して重要とは言えない新たな付加価値のために、私たちは古いものを手放し、新しいものを入れたくなります。まあ、その欲求のために古いものを壊そうとすることは、あまりないかもしれません。今の私も、小学生の頃とは違い、手持ちのものをわざと壊して、新しい品物を妻にねだるということはしません。けれど、やっぱり、私も新しいものに心惹かれます。電化製品にしる、服やアクセサリーにしる、情報機器にしる、私たちがそれらの新しいものを欲する時というのは、必ずしも壊れたり、使えなくなったりというタイミングではないことは、よくあるかと思います。

そんな風に考えてみますと、私たちは、完全無欠とか、永久不変とか、そういう永遠なるものに羨望の眼差しを向けつつ、その実、あまり長く維持され、存続するものには興味がないのかも知れません。正確に言えば、興味がないと言うより、興味があってもいずれ必ず飽きる、ということです。変化がない、変わり映えしない日常や、見慣れてしまった手持ちのものに、いつか私たちは飽きてくる。新しいものが欲しくなる。たとえば、古き良きものを愛でるとしても、それは、たぶん現代では失われた珍しいものだから、という理由からでしょう。古き良きものに永続とか不変という性質を見て、そこに魅力を感じているわけではないと思います。

もしも私たちが、永続や不変という性質に本当に魅力を感じるなら、多分、このような大量消費社会になっていなかったでしょう。これほどの経済発展もなかったと思います。永遠よりも進歩を、

不変よりも革新を望んで、新しいものを求める方向性が、新たな技術を生み出し、購買意欲を呼び起こし、経済を動かして、今の私たちの生活を形作っています。決して、それは悪いことではありません。世の中が便利に、快適に、楽しくなることは良いことです。ただ、そうした、まだ見ぬ進歩や革新を求めることと、永続や不変を求めることは、やっぱり異なる行き先を持つものなのだと思います。もしも私たちが、本当に永遠不変を手に入れると、多分、永遠に変わることなく飽き続けるんじゃないでしょうか。

キリスト教は、数千年前の書物である聖書を読んで「古き良き」ものを愛でるように思えます。聖書の中に永遠や不変も感じて、喜んでいるように見えます。しかし、その古い書物に書かれているのは、数千年前の人々が願い、希望した未来の出来事です。「いつか救い主が来る」と遠い未来を見据えて祈った旧約聖書の民がいて、いつか終末の終わりの日が来ると日々備えて生きた新約聖書の人々がいます。私たちは、聖書を読むことで、大昔のことに思いを馳せるわけですが、そこに登場する人々は、下手をすれば、私たちが生きる 21 世紀もさらに先の世界を思い描いていました。世界の終わりが来て、世界が完成するという、21 世紀の私たちでさえ、まだ知らない未来の出来事を願い求めていたのです。だから、キリスト教は、非常に未来志向の書物だと言えます。決して、聖書は、聖書に書かれた当時の世界が完全とも思っていないですし、それらが永遠不変とも思っていないませんでした。むしろ、目の前の世界は、世の終わりが訪れて、神様の国が到来することによって、劇的に変えられると思っていたくらいです。キリスト教も、また永遠とか不変よりも、進歩と革新を願っているのだと私は思います。昨日よりも今日の方が、今日よりも明日の方が、より素晴らしい神様の国に近づけるようにと、進歩と革新を続けている。考えてみれば、私たちが行う隣人愛も、祈りも、捧げ物も、今日よりも明日が良くなるようにという願いが根底にはあるわけですね。旧約聖書にあるイザヤ書 43 章 18 節 19 節に書いてあることも示唆に富むものです。「初めか

らのことを思い出すな。昔のことを思いめぐらすな。見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている。あなたたちはそれを悟らないのか。わたしは荒れ野に道を敷き、砂漠に大河を流れさせる」。キリスト教は、古き荒れ野に新しい道筋を示し、廃れた砂漠を押し流す大きな流れを期待するものだと言えます。すでにある既存の永遠や不変を求めたりはせず、むしろそれらは、初めからのこと、昔のこととして、廃れ、朽ちていくことを否定せずに受け入れていくのです。

だから、今日の聖書箇所は、ちょっと不思議なんです。キリスト教は、初めからのこと、昔のことを廃れるに任せ、朽ちていくことを認めて、それを良しとするくらいなのに、今日の聖書箇所では、なお朽ちないものがあると言います。「わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます」。この一文は、キリスト教における死の考え方の一端を示しています。私たちは、最後のラッパが鳴る時、それはつまり、世界が完成する日、終末の日のことですが、その日には、「復活して朽ちない者とされ、変えられる」と言います。そして、「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります」と。少々、変わった言い回しなので、意味が取りづらいところですが、要するに、本来、私たちは、人生の中で、社会の中で、時代の中で、朽ちるべき者であるはずなのに、朽ちることは加齢や老いや寿命によって自明のことであるのに、しかし、私たちは神様によって朽ちることのない者に変えられるということです。説教のタイトルにしたところのお話ですが、「不朽の我ら」なんですね。本当は朽ちて無くなるはずなのに。

神様の導かれる歴史は、どう見ても過酷です。あらゆるものが廃れ、枯れて、朽ちて消えてきます。大きな岩も永遠ではなく、あらゆる命には終わりが定められていて、輝く太陽にさえ寿命があ

ると言われています。そんな中で、「この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります」と言って、私たちに永遠の命を約束してくださっている。もちろん、その約束は、肉体的な不老不死の約束ではありませんが、私たちが死んで、この地上を離れても、神様の住まう天の国で安らかに過ごす幸いは約束されています。今日の聖書箇所は、パウロさんという非常に頭の切れる天才が書いた文章なので、難しく分かりづらいと思います。けれど、このパウロさんの言いたいことは、結局、「あなたは朽ちるにはもったいないくらいに価値のある存在だ」ということかと思います。神様の目からみれば、私たちは全然進歩しなくても、革新とは程遠くても、でも、素晴らしい存在なのだ。私たちは一人も漏れなく「神様の似姿」であり、「神様にわずかに劣るもの」だと、別の聖書箇所では言われています。自分に自信がなく変身願望あったり、承認欲求が強くて自らを飾り立てたりして、認めたくない永遠よりも進歩を、満足できない不変よりも革新を目指すとしても、神様の目からみれば、私たちは、今のまま、ありのままに永遠の価値を持つ、この世にあって、非常に類稀な価値高い存在だということを忘れないでいたいと思います。変な言い方ですが、神様は、決して私たちに飽きないのです。今の私たちが決して朽ちず、死から解放されて、永遠に神様のところに住まうとしても、神様は、いつも、いつまでも私たちに愛し、育み、喜びと平安とで満たしてくださいということなのです。

日々、新しい価値が生み出され、目まぐるしく情報が行き交い、変化と進歩が押し寄せる現代社会にあって、「まあまあ、言うて、あなたはそのままがいいんだよ」と言ってくれる神様の存在は、とても有難いと思います。そんな神様に祈り、頼り、仕えることは、少なくとも私にとっては、自信と安らぎを得られるものです。「こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです」。その通り、知ってほしいと思います。急速な変化をきたす現

代社会だからこそ、この世にあって唯一、永遠不変の主なる神様に結ばれていることを心得て、動じず、おおらかに参りたいと思います。今日から始まる1週間も、何があるか分かりませんが、神様に繋がっていることを信じて、安心して、自信をもって共に歩いて参りましょう。私たちは皆、朽ちることのない価値高い一人一人なのです。それでは、最後にお祈り致します。

神様。今日も、私たちにこの礼拝に招いてくださり、感謝致します。あなたに招かれた、その事実からして、私たちは、あなたに愛され、認められた尊い存在であることを知ることができます。あなたは、私たちのことを価値高いと認めて、聖書を通して御言葉を語りかけてくださいます。あなたを礼拝することは、あなたのお招きに応えること、あなたの御言葉を聞くことはあなたの信頼に応えることです。どうか、忙しなく過ぎゆく私たちの日常にあって、あなたの影に休まり憩うことのできる余裕と、あなたの恵みと祝福とに押し出せて歩み行く力とを、お与えください。朽ちることのない、朽ちることを許されないほどに価値高い私たちが、新たな週の一巡りも喜びと幸いを感じて、心を高く上げて過ごすことができますように。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。